

学術調査報告

2008年4月3日

(フリガナ)	チョウ エンコウ	入学年度	平成17年度
申請者名	張 延紅	学年	3年

研究題目	中国少数民族教育に関する考察 －延辺地区の事例を中心に－
主任指導教員	倉石 一郎

(1) 学術調査の目的

近年、先進諸国を始め世界各国で民族や言語、文化などの相違に起因する教育問題が様々な形で噴出し、教育のあり方が問われてきている。

中国では、1949年の中華人民共和国成立以後、一貫して積極的に少数民族教育政策を取り入れ、少数民族優遇政策を実施してきたと言われてきている。現在、中国では、少数民族に関する研究や論文などが数多く発表され、少数民族に対する教育・研究が非常に盛んに実施されている。ただ、素晴らしさが喧伝されている中国の少数民族政策であるが、その実態には正確な光があてられていない。

このような問題意識を持って、修士論文では延辺朝鮮族自治州の事例を取り上げ、中国の少数民族教育に見られる様々な問題点を検討した。

修士論文では、延辺地区における少数民族教育、なかでも女子教育を事例として取り上げ、学校文化（注1）に注目する事を通じて以下のことを明らかにする事ができた。

アンケート調査では、生徒達の意識に潜む性差の現状と実際行われている学校文化を把握し、これまでの民族教育の成果を強調する議論では不明確だった問題点を明瞭にすることを目的とした。聞き取り調査においては、「民族教育」を受けてきた人々による「語り」を通じてこれまでの「民族教育」の変遷を明らかにした。

以上の検証を通じ、中国・延辺地区における「民族教育」には、ジェンダーの視点からまだ改善の余地があることが明らかになった。

今回の調査では、以上の研究結果を元に、中国の少数民族教育政策の特色ともいえる「双語教学」（二言語教育）を受けている少数民族の人々へのインタビューを中心に行った。

今回の調査によれば、少数民族の人々はたくさんの負担を抱えながら学習し、取得した二言語にもかかわらず、社会に進出するとすぐに社会生活の面でも、学習面でも言語の壁にぶつかってしまうという。

このような中国特有の少数民族教育である二言語教育の現状について、少数民族の一員である朝鮮族の人々の語りからその実態を把握し分析する。分析を通じてライフストーリーを記録し、少数民族教育の中の二言語教育のあり方について検討のうえ、問題点を明らかにすることを目的とする。

朝鮮族への聞き取り調査実施以外にも、彼らの生活行事等に参加させてもらうことで、朝鮮族の人々への民族教育およびマイノリティ教育の浸透状況及びその影響を検討した。

(2) 調査実施地および期間

調査実施地：中国・吉林省、延吉市

延辺大学図書館・朝鮮族小学校

調査期間：平成 19 年 12 月 25 日 ～ 平成 20 年 1 月 16 日 (22 日間)

(3) 学術調査の具体的な実施内容

調査対象：現地に住む中国の少数民族（朝鮮族）4 名。

調査方法：インタビューした内容はすべてテープに録音した。基本的には調査対象者の語りに耳を傾けて聞く、途中で再度確認の質問などはしたものの、あくまでも調査対象者に自由に語らせる。

録音したものは後からテープ起こしをして再分析する。

訪問目的：中国の少数民族である朝鮮族への聞き取り調査のため。

インタビュー目的：民族教育を受けてきた朝鮮族への半構造化自由回答方式のインタビューを行う。その分析を通じ、彼らのライフストーリーを記録する手法によって中国の少数民族教育における「二言語教育」のあり方について検討し、問題点を明らかにする。

詳細：対象者プロフィール

対象者 (性別)	職 業	年 齢	学 歴	家庭構成	公的な場での使用言語	生活での使用言語
A (女性)	定年退職	60	大学	夫と二人暮らし	漢語（注）	朝鮮語
B (女性)	会社員	35	大学	夫と娘と三人暮らし	漢語	朝鮮語
C (女性)	自営業	43	専門学校	娘と二人暮らし（夫は出稼ぎ中）	朝鮮語	朝鮮語
D (男性)	定年退職	63	大学	妻と二人暮らし	漢語	朝鮮語

注：中国国内での使用する共通語としての中国語を通称漢語と読んでいるため、ここではすべて漢語という表記を使用する。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

「双語教学」（二言語教育）からみる中国の少数民族教育

－延辺地区の事例を中心に－

1. はじめに

今回の調査地である延辺地区は、吉林省東南部に位置しており、朝鮮族が最も多く居住している地域である。総面積は4万2,700平方kmで、ロシアおよび朝鮮民主主義人民共和国と国境を接している。1952年9月3日に吉林省延吉市において「延辺朝鮮族自治区創立大会」が開かれ、「延辺朝鮮族自治区」（同年12月に「延辺朝鮮族自治州」（以下延辺地区と称する）に改称される）が成立した。

1990年に行われた国勢調査の資料によると、同自治州内には漢族と朝鮮族をはじめとする16の民族が居住しており、総人口は207万9,700人となっている。民族別人口では、漢族の人口が最も多く全体の57.08%を占め、朝鮮族はそれに次ぐ39.5%を占めている。

中国に居住している朝鮮族の人口はおよそ200万人で、全体の9割以上が東北三省（黒竜江省、吉林省および遼寧省）に居住している。なかでも、吉林省延辺地区には80万人以上の朝鮮族が居住しており、朝鮮族の文化を維持・発展する主体となっている。

多くの場合、朝鮮族は漢族と混住しており、飲食や住居など日常生活の面でも漢族の影響を大きく受けているが、一方では強い民族意識を潜在的に有しており、風俗習慣や言語・文字など民族固有の文化が今でも高度に保たれている。

2. 教育政策－「双語教学」

各民族にはそれぞれの言語や文字を発展させる権利があり、自治区域において公務を執行する際にも、少数民族の言語を使用する権利があることを中国憲法は保障している。また、国家は少数民族教育事業発展のために財政的な援助を行っているほか、少数民族地区に所属する漢族の幹部に対して少数民族の言語を学習するように勧めている。それと同時に、少数民族に対しても同じく漢語の学習を勧めている。

朝鮮族の状況を見ると、朝鮮族の少ない地区は言うまでもなく、多く住む地区においてもまた民族語教育を実施すると同時に、国語である漢語の教育をますます重視するようになってきた。

朝鮮族がもっとも多く居住している延辺地区の龍井市の場合、小学校の段階から漢語を学んでいるにもかかわらず、学校外では中国語を話す機会がほとんどないため、一般的に学生の漢語能力が低いと指摘されている。そうした状況のなかで、大学に入学してから漢語によって行われる講義についていけるかどうかが問題となっている。

少数民族地区の学校では、いかに民族教育の特色を守るかという問題をめぐってさまざまな議論が交わされてきた。民族語ですべての授業を行うことは、その民族の言語文化を維持するうえでは大変重要なことである。しかし漢語レベルの低下は少数民族地区以外での就職を困難にし、また他大学との交流を図ったり、全国各地の優秀な人材との競争にも不利であるため、今ではほとんどの朝鮮族学校、とくに高等学校と大学では、民族語のみによる教育を廃止するに至っている。

朝鮮族の大学でもっとも有名な延辺大学の場合を見ても、1950年代には学校の教職員がすべて朝鮮族で、教材もすべて朝鮮語で印刷されたものであった。ところが1960年代に入ってから、他民族の学生を受け入れるようになり、漢族の教師も採用し始め、その後は次第に漢語による授業が実施されるようになった。しかし他方では、民族語教育の衰退に対する反対の意見も出された。それに対して延辺大学では、漢語で授業を行う漢語クラスと、朝鮮語で授業を行う朝鮮語クラスを設けて問題の解決を図った。このような「双語教学」は賢い選択といえるが、朝鮮語クラスを選択する学生数の減少に伴う教材印刷費の高

騰により、学校の経費を圧迫する結果を招き、現在では朝鮮語教育の特色がますます薄れつつあるのが現状である¹。だが、こうした変化は時代の趨勢であり、少数民族教育が中国の過半数を占める漢族の影響を受けるのは避けられないことだと考えるべきであろう。

また大学入試では、「辺疆や山岳・遊牧地区の受験生に対して合格水準を引き下げ、その他の地域に住む少数民族に関しては同等条件の下で漢族より優先的に合格させる」方針が採られている。たとえば北京市では、1984年から少数民族の受験生に対して、合格ラインを一律に10点下げることを行っている²。

大学入試に用いられる言語については、1962年に制定された規定（「招考新生的規定」）によると、少数民族の受験生で、自民族言語課程で高等学校を卒業した者に関しては、古典漢語の試験を受けなくてもよいとされている。また、1980年に制定された規定（「高等学校招生工作的規定」）では、少数民族が多く住む地区の受験生については、漢語試験のほかに民族語で受験することが可能となっている。さらに、1987年の規定（「普通高等学校招生暫定条例」）では、少数民族の高等学校卒業生で、漢語によって講義が行われる大学を希望する場合、国語（漢語）試験は漢語と民族語の両方を受験し、その合計点数の50%を国語成績とすることになっている³。なお、大学で学資補助金を受ける際にも、大学によっては少数民族を漢族より若干優遇する措置が採られている。

3. 人々の経験から見る「双語教学」

ここでは筆者が行ったインタビュー資料を用い、人々の実体験を通じて「双語教学」がどのような役割をしているのか、まだどのように影響していくのかについて検討する。

筆者が行ったインタビュー調査の一部分をまず見ていくことにしよう。下記に記載するのは筆者が行ったインタビュー調査のごく一部の資料についてテープ起こしをしたものであるが、内容は十分に検討する価値を有している。

Aさんは58歳の女性で母語は朝鮮語である。8歳で小学校に入り、中学校を卒業後は推薦で長春にある短大に進学した。短大に入学して一年経たないうちに中国の文化大革命が起り、大学で小説ばかり読む生活が二年ぐらい続いたという。短大を卒業後は延吉にある工場に配属され、仕事をはじめた。

¹ 韓 2001 ; 80-81

² 呉等 1998 ; 204

³ 李等 1999 ; 375

これまでずっと工場で管理職として勤めていた彼女は、1962年当時の学校生活と、大学進学時（1964年）の様子を次のように語ってくれた。

A：当時（1962年）中学校の授業は全部朝鮮語だった。当時は外国語の授業はなく、（朝鮮語以外には）ただ漢語を勉強していた。小学校では漢語の勉強をしていたとしても、先生が朝鮮語で授業を行っていたが、中学校からは漢語の授業は、先生が教室に入った瞬間から全部漢語で行っていた。授業は漢語で・・・

A：うん、漢語の授業は全部漢語で行った。中学校の時の漢語の授業は全部漢語で行っていたが、三年間学習しても、長春に行って漢語で会話をしようとしていたら、上手く話せなかった。

当時三年間漢語の学習をしたので、漢語での意思疎通はできるものの、宣伝（文化大革命時に人々の政治的意識を高めるために伝達された文章）などになると全然レベルが足りなかった。でも宣伝文を読んでって言われたら、宣伝文章も読んだりした。学校で勉強したものの（基礎的な漢語力）があるので、（自分の）レベルがそこまで達して無くっても（あまり高くなかったが）宣伝文を読んだりした。

当時私たちの寮の隣に図書館があって、私たちはよく図書館で小説を読んでいた。私と同じぐらいの年頃の何人かは・・・4、5人がひとつのグループになって・・・当時小説をよく読んでいたおかげで、漢語のレベルがずいぶんと上がったと思う。また文章力もアップしたと思う。だから実を言うと文化大革命のおかげだとも言えるのかな。でも学校を卒業して職場に分配（政府から職場をあてがわれた）されてきた後に、文化大革命の歴史は全面的に否定的な歴史とされた。当時の文化大革命は誤った判断がもたらした錯誤的運動という位置付けだったから・・・だから文化大革命の時期は言葉通りめちゃくちゃだった。

文化大革命時代に大学生活を送っていた Aさんは当時の「双語教学」の状況をこのように語ってくれた。話しにもあるように、当時もしっかりと二言語教育は行われていたもののレベルはそれほど高くないようだ。Aさんが語ってくれたように、漢語のレベルは意思疎通は可能だが文章力などはそれほど高くなく、通達文章をやっと読めるぐらいのレベルだったようだ。

次に Bさんの話を見てみることにしよう。Bさんの語りからは、民族学校出身の生徒たちが一生懸命勉強して延辺州以外の高等学校に進学した後、最初に経験するのが言語の壁だという事を物語っている。

Bさんは30代の女性である。彼女は中国吉林省延吉市で生まれ、母国語は朝鮮語である。8歳のときに小学校に入学し、そのまま中学に進学、そして他省の専門学校を卒業ののちに延吉に戻って就職。現在は通信業界に勤めている。延辺地区で毎日仕事に励む高学歴(仕事をしながら大学に通い卒業)のキャリアウーマンでもある彼女は、筆者のインタビューで専門学校進学についてこう話す。

B: で、中学校卒業して専門学校に入ったけど、当時延辺からうちの学校に受かったのが私以外に3人いた。二人が延吉、残りの一人が龍井からだったの。私たちが入学したその年が延辺から入学生がきたのが初めての年だったので、みんな私たちに好奇心をいっぱい持っていたの。二つの言語を話せることに驚いたみたい。学校に入って、最初のころは言語環境に慣れるのが大変だった。私は普段から家で漢語を話しているから、特に難しさを感じなかったけど、ほかの人は結構大変だったみたい。特に龍井からきた彼女は途中で学習について行けなくなり、一年留年した。留年したことにショックを受けて自殺を図ったり ふう

うん、大騒ぎになっていたよ。

彼女が当時通っていたのは大学ではないが、専門学校として有名校で学力レベルが高いことで知らされている。当然その学校に受かった生徒たちも、中学校の時は自分が通っていた中学校では成績がトップクラスだったわけである。そういう経験の持ち主である彼女たちが故郷を離れ進学したときに、まず壁にぶつかるのが言語の問題であった。

続いてCさんについて見て行こう。

Cさんは43歳の女性である。吉林省和龍のとある小さな村で生まれ、母語は朝鮮語である。9歳で小学校に入り、中学校を出てから延吉にある師範専門学校を卒業し、そのまま延吉で就職した。現在は個人で朝鮮族幼稚園を経営している。漢語を使用する機会があまりないせいか、漢語はそれほどうまく話せないため、公の場以外では、たとえば師範系統の会議(公式な師範学校関係者の会議)以外で、漢語で話すには抵抗があるという。Cさんはこのように話している。

私はずっと朝鮮族学校に通っていた。学校では一生懸命勉強していて、当時の目標は延吉に行くことだった。いま両親がいる田舎が嫌だったの。うん、なんとなく田舎が嫌で進学して延吉に行くことを決めたの。延吉にある師範系統（師範関係）の専門学校に受かって延吉に発つその日は本当にうれしくて、うれしくて・・・無事専門学校も卒業できて最初はほかの人が経営している幼稚園で先生をしていたが、結婚を機に幼稚園経営をすることになった。自分で幼稚園を経営してから初めて分かったの。学生時代に習った漢語、うん、一所懸命習ったけど・・・漢語のレベルが低い私には、うん、都市部で開催される師範系統（師範関係）の会議などに出かけると、話している意味はなんとなく分かるが、自分から意見発表とかしようとしていたら、漢語より朝鮮語が先に出てしまったり、一回発言しようと思ったら・・・それはもう大変で・・・

それでうちの娘には漢族学校に行かせようと思った。それがおじいさんの反対で・・・私たちはもうこの年なんだから、これからまた別の都市に行ったりすることは無いだろうけど、娘たちのこれからは・・・中国で生活しているからやはり漢語を上手く話さないとね。だから娘には漢語を一所懸命勉強するよにとっている。

Cさんは、自分の体験を娘にはさせるまいという気持ちで、娘が漢語の勉強に力を入れるようにいつも注意を払っているそう。おじいさんの反対で漢族学校へは入学させられなかったものの、中国での生活、これからの娘の将来などに漢語の習得が必須であることを自覚しているようだ。

目覚ましい経済発展を遂げている中国において、ビジネスの共通語としての漢語という認識に基づき、意思疎通ができるレベルの漢語の習得だけではなく、ビジネスレベル、かつ高い文章力をも兼ね備えた漢語能力が必要になってきたのが分かる。

最後にDさんについて見てみよう。

Dさんは黒龍江省生まれの男性である。Dさんが就学した当時は村に中学校がなく、中学は隣の村の漢族学校に通っていたという。高校卒業後軍隊に入り、18年間軍隊に服役した。服役後は地方で公務員として勤めていた。中学のとき漢族学校に通っていたDさんは次のようにいう。

私は中学校は漢族学校に通っていた。それから高校も漢族学校を卒業し、(軍隊に)入隊

したんだ。漢族学校で身に付けた漢語で、入隊した後もさほど言葉の面で困難を覚えた事はない。部隊ではみんなと漢語で話していたし、当時政治審査（個人の政治的意識の審査、身分審査、職場での活躍状況等が含まれる）がよくあったのだが、審査の度に漢族に間違われていた。で、審査中には朝鮮族だったのかとよく聞かれた。（退役後に）地方で公務員をしているときだった。一度延辺で韓国駐在人員（領事館）選抜があって、その話が私のところに持ち込まれた。当時は韓国駐在員に選ばれるんじゃないかって期待していたけど・・・なんか推薦した人は私のことを漢族だと思っていたみたいで・・・結局政治審査でだめだった。おそらくは民族が朝鮮だったから・・・まあ、この話はもう過ぎた話した。でもやはり中国で生活しているんだから中国語は必須だ。私は当時村に朝鮮中学校が無くて、漢族学校に行ったけど、小学校で学んだ朝鮮語はまだ覚えている。私がこういう話をすると、妻はいつも朝鮮語の文字もろくに書けなかったけど、今はよく文字も書けるようになったねって嫌味半分に言うんだ。ハハハ・・・たしかに私は小学校で習ったものをほとんど忘れていて、言葉は話せたが字は書けなかった。で、年を取ってからまた練習したんだ。いまも、あんまりうまくは無いけど・・・でも・・・

4. 考察

D さんの話は筆者にある衝撃を与えた。朝鮮族だから政治審査で落ちて韓国駐在人員に抜擢されなかったという。でも中国で生活しているから中国語が上手でないといけないという。一見矛盾しそうな話だが、でもそれが事実だ。中国で生活している少数民族たちはいろいろなハンディを背負って生活をしているのも同様だ。言葉ひとつにとっても、少数民族の子供たちは、漢語を学習するために、小中学校において通算で 1228～1240 時間⁴も漢族の子供達を上回る勉強の負担がある。しかし重い負担を背負いながら学習したにもかかわらず、社会に出たり、あるいは漢語圏に入ったらすぐに言語による壁にぶつかるのが現実だ。

このような問題について、延辺地区では二言語教育を行なう上でいろいろと模索を行っている。

1980 年代以後、延辺朝鮮族小中学校の二言語教育は依然として時間をたくさん取っているが効率は低い状況だ。これは民族学校の教育品質向上を制約する要因にもなる。こういった状況を打開するため、1987 年には「延辺民族教育改革事務室」が立ち上げられ、二言

語教育を中心とした全体的な民族教育改革実験が展開された。1988年からは「朝鮮族学校二言語教育改革の実験と研究」が本格的に始まった。15校70あまりのクラスで行われた第1段階の実験は1994年に終了した。この6年間の実験研究の成果をもとに、漢語授業の開始学年が小学校2年から1年まで引き下げられた。このように、延辺地区では合計7回にわたり、二言語教育を行なうにあたって、漢語学習開始学年を引き上げたり、引き下げたりしてきた。

また、高校では現在漢語レベルテスト（漢語水平考試。略称は HSK）という試験が始まっている。漢語レベルテスト（HSK）は漢語を母語としていない者（外国人、華僑、中国国内の少数民族を含む）の漢語レベルを測定するために確立された国家レベルの標準化テストで、その先進性はすでに各国の専門家の認定を得ている。少数民族学校で漢語レベルテスト（HSK）を行なうのは、単に大学入試のテスト方法だけを改革するのではなく、HSK が体現した二言語授業の考えと原理で漢語授業のシステム全般を改革し、漢語教育の規範化、標準化を実現し、学生の実際の漢語運用力を向上させるためである。

さまざまな模索と実験が行なわれている「双語教学」だが、いまだに有効な結果が出ていない。実際に社会に出たり、または大学に入学すると、つまり一步漢語圏に踏み出すと、やはり言語という壁がたちふさがっているのが現状なのだ。

新しい時期に現われた新しい問題であるので、必ず科学的、政策的、長期的な法則によって教育の改革を深化し、積極的で安定した発展を求めべきであり、またその法則にあった新しい教育のモデルを見つけるべきではないだろうか。

注1：

学校文化の定義：

学校文化：学校集団の全成員あるいは一部によって学習され、共有され、伝達される複合体。

学校文化は次の三つの要素からなる。

- 1.物質的要素：学校建築、施設・設備・教具・衣服等、学内で見られる物質的な人物。
- 2.行動的要素：教室での授業＝学習の様式、儀式、行事、生徒活動等、学内におけるパターン化した行動様式。
- 3.観念的要素：教育内容に代表される知識、スキル、教職ないし生徒集団の規範、価値観、態度。出所：日本教育社会学会編 『新教育社会学辞典』 東洋館出版社 1986年 117頁

4 岡本 1999 ; 160

(5) 調査地・文書館建物などの写真

延邊大学の正門－中国吉林省



延邊大学 図書館

